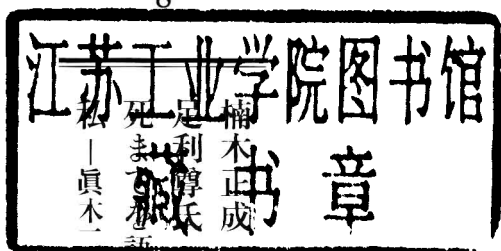


直木三十五全集

8

直木三十五全集

8



直木三十五全集第8巻

平成三年七月六日発行

編集協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発行所 株式会社 示 人 社
東京都文京区水道一―九一―

郵便番号 一―二―

電話 東京三八二―二四一三

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 イワサキ・ミツル

装幀

落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第8巻（昭和9年4月1日発行）を用いた。

第八卷 目次

楠 木 正 成

正 中 の 變

二

笠 置、赤 阪

五

潜 行 と 奪 還

九

千 早 城

一三

建 武 の 中 興

一五

湊 川

二〇

足 利 尊 氏

二五

置 文 事 件

二六

喪 中 に 立 つ

二八

笠 置 落 つ

二九

赤 阪 攻

三〇

傾く日	三二〇
鏡の宿	三二四
擧兵	三三五
六波羅陷落の日	三三九
千壽と竹若	三四六
戦争後	三四一
新田義貞	三四六
動搖	三五五
公武の不和	三五九
彼と彼等	三六六
尊氏東下	三七五
若宮小路の邸	三八三
淨光明寺	三八七
死までを語る	三九五

私——眞木二十八の話——

四六三

楠
木
正
成

正中の變

修驗行

一

「南無歸命頂禮、三所權現、滿山護法十萬の眷屬、八萬の金剛童子、垂跡和光の月明かに、分段同居の闇を、照し給へ」

土埃りを浴びた肩、色の褪せた衣、汗と、脂とで、襟のあたりの白衣は、赤い色をしてゐたが、聰明な眼、氣品の高い額から、頬、慈悲心を現してゐる肩の微笑——そして、その大きい刀が、いかにもよく、釣合つてゐる、頑丈な背と、骨格。修驗者は、さう、經卷を開いて、口ずさんでゐたが、半眼に開いた眼は、その家の内外を、細かに、眺めてゐた。

「参らさう」

一人の、鬚の延びた、短い袴に、百姓ながら、一本、脇差をさして、鳥目を手に出てくると、修驗者は

「千手陀羅尼、御覽候へ」

と、云つて、經卷を、擴げて、鳥目を、受けた。經卷は金襴と、紺地とから——そして、その紺地に、金泥で、比叡山三所權現、良順と、書いてあつた。叡山の朱印が、眞赤に、鮮かな色をして、捺してあつたし、熊野三山に、千日の修行をしたといふ印の熊野別當の、三羽鳥の印も、捺されてあつた。鳥目は、經卷の上から、さらりと、滑つて、修驗者の前にかけてゐる袋の中へ、落込んだ。修驗者は、經卷を納めると、腰の法螺貝をとつて、三度、吹き立てた。

「忝なう存じる」

百姓が、一體して、引込まうとすると

「家の端を、拜借したいが」

「お休みか」

「晝食をしたい」

「遠慮なく、湯を進ませう。こちらへ、ござれ」

「それは——遠慮せずと」

修驗者は、大股に、廣庭へ、入つてきて、縁側へ、箆を

おろして

「暫時、拜借申す」

と、奥の方へ、手を突いて云つた。

二

女房が、木の碗に、湯を入れて、もつてきた。

「お上りなされませ」

百姓が、同じやうな碗に、汁を盛つてきて

「何も、響應でさんが」

と、縁側に竝べた。修驗者は、箆の中から、竹の皮に包

んだ玄米の握り飯を出しながら

「珍重々々」

と、頭を下げた。箆の中には、書物や、米袋や、佛像や、

紙、着物などが、入つてゐた。百姓が、去らうとすると

「この邊は、もう、楠木殿の、御領内かの」

と、聲をかけた。

「いかにも」

と、百姓がうなづく

「さうであらうな。他領から入つてくると、臭からしてか

らがちがふ」

「臭？」

「あは、ムム——いや、何の家の藏の中をのぞいてみても、

米は一杯、何の仁も、馬一匹、腰刀一本、いざといふ時

の用意、ほとく、感じ入つた」

さう云ひながら、碗へ手をかけて、ちつと、見てゐたが、

その中から、一つの寶を、挟み上げて

「ほう、これは、珍しい、様かなう」

「いかにも」

「椽を食べるか」

「凡そ、山野に生じて、食べられる程の物は、ことごとく、食しますの。楠木兵衛殿さへ、朝は、椽粥を、召し上つてござる。上から、下まで、一汁一菜ぢや。これから、行つて、御覽じろ。馬は、豆を食ふとるが、人間は様ぢや」

「それで、誰も、不服申さんか？」

「不服？——不服とは、食べ物にか、御領主にか？」

「二つながらに」

「はゝゝゝ、修驗者殿には、口の慾が、おありかの」

「いや、わしには無いが——」

「無いがよいか、有るがよいか」

「こりや、恐れ入る、いや、その通り」

右少辨俊基は、いつかは、旗上げをすべき時に、頼まうとする武士を求めるが爲に、修驗者になつてゐたが、河内國へ入つて、楠木氏の領地へ、踏込むとすぐに——馬の肥

へてゐるのを見たし、藏の中の米の、うづ高いのを見たし、百姓の武備の整然としてゐるのとその落付きを見たし、それから又、自分に對して、めぐんでくれる人々の多いのと、その敬神の態度のつましさとを、他領よりも、いちぢるしい多さに感じた。

（保田を討ち、湯淺を討つて、武邊一圖の武士と思つてゐたが、この様子では、治國の道にも、達してゐるわい）

と、思ふと、すぐ、京師の近くに、楠木のやうな武士のゐるのが、誰よりも頼もしく思はれてきた。

（玄惠の許で、再三度、見かけた者が有ると申してをつたが、それが、眞實なら、學文の事も、少々は、覚えがあらうし——もし、玄惠の説く、宋學に、志でもつてゐるなら、屈強の武士であるが）

さう思ふと、早く逢ひたくなつてきた。

「代りを進ぜよう」

と、汗をすゝめる百姓に

「楠木殿の館へは、二里が、程もあるか」

「水分まで、二里半か」

俊基は、笈に手をかけて

（一刻すれば行ける）

と、思ひながら

「近頃は、御在館かの」

百姓は、うなづいて

「御館か、観心寺か——暇だと、観心寺で、學問してござ

る」

「観心寺？」

「観心寺の、瀧覺坊についての」

「瀧覺、ほう、瀧覺」

「お存じか」

「いさゝか」

俊基は、笈を負ふと

「いかい御馳走になつて」

と、御叩頭をした。

三

大きい、そして、深い森を背うて——森の中に、邸があるかのやうに、邸の外は、老樹が、枝と、枝とを交へ、葉と葉とを、くつつけて、風に、ざわめいてゐた。

邸は、頑丈な土塀に圍まれてゐて、土塀の外には、幅の廣い堀が、木の葉を浮べて、淀んでゐる、その濠の外には、小高い堤のやうなものが、邸のうしろまで、連つてゐた。

藥葺きの大きい門は、頑丈な木で、がつしりと、正面に建てられてゐて、柱も、扉も、古びた色をしてはゐたが、少しの裂け目もなく、蟲もついてゐなかつた。それは、誰にでも、内福な、舊家だと思はせるのに、十分であつた。

そして、その門の入つた所に、廣い木の無い庭があつて、右手に、馬屋と、番小屋とが——正面には、明るい障子のはまつた板葺きの部屋が、陽當りのいゝ縁側を曝らしてゐ

た。そして、縁側には、二ヶ所に、上り口の、段がついてゐた。

左手は、築地で、その中は、庭らしく、いろいろの木が、姿を出してゐた。

修験者は、門の外で、法螺を、三度び吹いて、門番が、禮をした前を、正面の部屋の方へ行つた。そして、大きい聲で

「これは、観山、三所権現に仕へ申す修験の者でござる、熊野御山へ、参詣の道すがら、都の便りを、お聞かせし、この家の主人の願ひを聞き、國家安穩、五穀豐穰、眷族繁昌、子孫長久を祈らせ、奉らん心願にて、参つた。早々、取次がれい」

障子が、開いて

「暫く」

と、一人の士が、頭を下げた。そして、引込んで、暫くすると、庭の方から、小者が、水桶をもつてきて

「おすゝぎ」

と、脚もとへ置いた。修験者は、笈を置き、草鞋を脱いで、衣の埃を拂ふと、板の段々を上つて、土に連れられて、奥へ入つて行つた。

「重いぞ」

と、一人の少年が、笈を、抱いて、そのうしろからつゝいた。

四

部屋の中の柱は、黒い光澤に、かゞやいてゐるし、暗く、冷たい格天井は、見事な木を使つてあつた。だが、部屋の中には、何の装りもなく、板戸、板壁は、頭の當る所だけが油光りに光り、床の間は、古い、金砂子の銚けたまゝに――たゞ、その上には、書卷が、机の上にも、本棚の上にも、置いてあつたし、見事な雑刀が一口り、立てかけてあつた。

「主人は、程無う歸りませう」

齡とつた士が、さう云つて立去ると、六つか、七つ位の、稚子揃の子供が、小袖をきて、細い、病勝ちらしい頬をして——だが、聰明な眼で、修驗者を見ながら、湯をもつて入つてきた。そして

「いらせられませ」

「お」

俊基は、笑つて

「お父が居らんで、淋しくないか」

子供は、笑つただけで、返事しなかつた。

「名は、何と申される？」

「正行」

「行とは？」

「道を行ふの行ふ」

俊基は、そのむつかしい言葉を知つてゐるのに、齡との、

不釣合を感じながら

「お父は、左様な、道の事を、教へるのか」

「うん、いつも、道々と、申してをります」

さういふと、立つて、出て行つてしまつた。俊基は、暫く、眼を閉ちてゐたが、立上ると、床の間の上の棚から、一冊の本をもつてきた。そして、膝の上で、表紙を見た。それには「論語」とあつた。

(論語を——この僻地で——)

さう思つて、一二枚まくると、本を、上へもつてきて

「ほう、刷つてある」

と、呟いた。そして、奥の方を、返してみたり、表紙も、

本版なのに、つくぐと、眺めたり——

(まさか、楠木が、刷らせたのでもあるまいが——京師の學者の間にも、寫し本が多いのに、木刷りとは?)

俊基には、思ひもかけぬ事であつた。もし、これが、楠木氏の仕業ならば、その學問への志は、竝々で無いと、

感じた。そして、さう感じると共に

(學問に、こう深入りしては、武略の方が、おろそかになるが——わしには、學文は、左まで無うてもよい。武略の人間が、欲しいが——)

と、思った。そして、紙を繰ると、朱點が打つてあるのが、眼についた。紙を繰つて行くと、上の空欄にも、下の空欄にも、朱筆の、書き込みがあつた。何んなによく、讀んでゐるか——俊基は、暫く、正成の顔を想像して、ちつと、眼を閉ぢてゐた。

「お待ち申す」

一人の士が、入つてきて

「某は、主人の弟、正季と申す」

「三所權現屬、良順と申します。早速の御承り、忝なうござる」

俊基は、挨拶をして

「主人の好學、はとく感じ入り申す」

「何の」

正季は、微笑して

「何れ、後刻」

と、いふと、立上つた。俊基が

「この御本、何れにて、作られたかな」

「當邸にて、主人の、慰みでござる」

さういふと、すぐ、出て行つてしまつた。

五

俊基は、暫く、首を傾けてゐたが、立上つて、書棚の所へ行つた。そして、別の本を一冊手にして、座へ戻つてきた。

膝の上で、表紙を見ると、「朱子語類鈔鐸」としてあつて、表紙も、中も、正成の文字らしく、所々にある、朱の註や、書込みと、同じ筆蹟であつた。

(珍しい本もよんでゐる)

俊基は、まだ見ぬ正成の風貌を考へながら、京師の學問

ありと稱せられる公卿の中でも何れだけの數の人が、この本をもつてゐるか？

俊基は、正或が、この程度の書物を、何ういふ風に理解し、何の程度に、自分の物にしてゐるか、この書の中から、考へてみたくなつた。それで、本を開くと

「事只一箇の是非あり、是非既に定まりて、却つて一箇の是處を撰んで、行ひもち去れ。必ず回互して、人々好しと云はんことを得んと欲せば、豈、此理あらんや。然して、事の是非、久しうして却つて自ら定まる。時下、須らく是れ我に在る者の嫌なく、仰いで愧ぢず、俯して愧ぢざるべし、別人好しといひ、惡しといふことは、他に管せしめよ」

その横に、朱の點が振つてあつた。俊基は、微笑して、次を繰つた。

「毎常に、事に遇ふ時、也、分明に理の是非、これはこれ天理、那はこれ人欲なるを知得す。然れども做

す處に到れば、又却つて、人欲の爲に引き去られ、做し了るに及んで、又却つて悔ゆ。此は是れ如何。曰く、此れ便ち、是れ克己の工夫無し。這樣的處、極めて他の與に、掃除打疊せんことを要す。一條の大路、又一條の小路あらんに、自家也合に大路を行くべきを知得す。然れども、小路に、箇の物事あつて、引著せられ、知らず、覺えず、走つて小路に従ひ去り、前面の荆棘蕪穢に至るに及んで、又却つて、悔を生ずるが如し。これ便ち是れ天理人欲交戰の機」

こゝにも、朱點があつた。そして、その上欄の空白に

「夫れ生は滅するに有り、仁はた虚の徳萬古不滅者也。萬古不滅者を捨て有滅の者を守るは惑也。故、士人、彼を捨て、此を取る。理ある哉。常人の知る所に非也」

それは、正成の感想を、書き入れたものらしかつた。俊基は、ちつと、本を眺めてゐたが、大きい溜息を、肩です

ると、膝の上へ、本をおろした。

「問ふ、何をか主」といふ、曰く、無適」

と、いふ言葉や

「是はこれ天理、非はこれ人欲、是は即ち守つて失ふ事勿れ。非は即ち去つて留むる事勿れ。これ一身を治むるの法なり」

と、いふ文字で——それは、この語類の中の言葉であると共に、京師で玄惠法師から講義された言葉でもあつた。

（正成は、わしよりも、玄惠には學んでゐるらしい）

と思ふと、正成より外には、頼むべき武將がなくなつてきた。

（正成なら、説けば會得するであらうし——いゝや、説かずとも、自ら進んで、お味方をするかもしれない。この京の近くに——この山間の狭に、かうした武將の居る事は、天運未だ墮ちざるの兆だ）

俊基は、遙かの門の所の馬の足音さへ聞かうとするやう

に、耳を立てた。

六

いつ戻つてきたとも、いつ近づいたとも、俊基に感じない間に、廊下から

「客人は」

と、いふ聲がして、障子が開いた。家來の、膝をついて開けてゐる身體の上に、脊の高くない、瘦せてはゐないが骨や、角の眼立つ侍が立つてゐた。俊基と、眼が會ふと微笑してゐたものが消えて

「お待たせ致した」

と、云つて、座へついた。そして、俊基が、名乗りかけようとして、膝を正し、珠數を掌へかけたのを見ると

「卒爾ながら——京師にて、お見かけ致したお方と覺えまするが、いかに」

俊基が、黙つて、ちつと、正成の眼を、凝視してゐると

「玄惠先生の下にて——如何なる儀で、ござりませうか、異なる風體にて——」

俊基は、微笑した。正成も、それにつれて、笑を唇に上せながら

「右少辨俊基卿でござりませうがな。修験者の形にて、温泉廻りに出られたと、この間より聞いてをりましたが、この草深き所——卑しき武家の邸へ、何の御用がござりませうか——御名乗りもなく——」

靜かに、云ひ終ると

「手前、主人、兵衛でござりまする」

と、云つて、膝の上へ、頭を下げた。

「玄惠法師の許へ、いつ頃から、見えてをられた」

「はい——七八年にも、成りませうか」

「その節、某を御覽じたか」

「外に、日野殿、萬里小路殿——」

俊基は、膝の横へ置いてある書物を、出して

「断りなく披見して」

と、正成の前へ、押出して

「感じ入り申した」

軽く頭を下げると

「これは、これは」

召使が、干柿と、干栗とを、三寶へのせてもつてきた。

「御食事は」

「時刻時に」

召使が、丁寧な禮をして退ると

「兵衛の明敏、察してをられやうか」

「はつ——何事か——不敏、不明、一向に」

正成は、首を傾けた。

「ふむ」

俊基は、伏目になつてゐる正成の眼を、ちつと見ながら

「北條の世を、何う思はれるな」

正成は、鋭く、俊基を、見上げると

「先を急がれませうか」

「いゝや」

「お泊り下されませうか」

「一夜、お頼ん申さう」

「その儀ならば、その事、ゆるりと、お語り申しませう。

まづ、その旅衣を、輕くなされて」

俊基は

(察してゐるな)

と、感じた。京を出る時に、考へてゐたよりも、正成の領地へ入ると、すぐに感じた事。書物で知つた事。そして、かうして逢ふと、武勇一邊の傲頑なる武人らしい所は少しもなく、又、武家に通有の、公卿に媚び、形の上でのみ敬ふやうな所が少しもなく、資朝や、藤房と話してゐるのと同じやうに感じたし、すぐ、親しい友達になれる人、頼み甲斐のある男、といふ事が、この短い話の間に十分にわかつた。

七

「お丈に合つた丁度の品が無うて？」

正成は、湯から上つて、白の直衣と着かへて入つてきた

俊基をみて、笑つた。

「何の」

さう答へたが、公卿の中でも、筋骨の豊かな俊基には、

正成や、正季の直衣は、少し、小さかつた。

燈臺が二つ、主客の右に立つてゐて、つゝましく焰を立てゝゐたし、干魚、小鳥、昆布などが、土皿の上へ置かれ

て、大きい三寶にのつてゐた。そして、白木の曲げ物の上

には、餅だの、干柿だの、勝栗、木の實の類があつて、酒

の用意もされてゐた。

「御覽の山間にて、何も、お口に合ふ物がござりませぬ」

「いや、看より、話が所望ぢや」

「話も、都の便程、面白うはなし——」